

あらまほしき長野県の姿を求めて

1. はじめに

本県は、本州のほぼ中央に位置し「日本の屋根」とも呼ばれるように、日本アルプスなどの険しい山々に囲まれ、幾多の河川の源となるなど、変化に富む豊かな自然環境に恵まれています。そして、河川に沿って拓けた肥沃な盆地などを中心に都市が発展し、特色ある文化を育みつつ220万人の県民が暮らしています。

厳しい自然条件の中であって、先人達の弛まぬ努力により高速交通網の整備をはじめ、道路・河川・砂防施設の整備などが積み重ねられてきた結果、移動時間の短縮や自然災害に対する安全性の向上など着実に改善が図られてきました。

しかしながら昨年は、年末から年明けにかけての豪雪に続き、7月には梅雨前線豪雨により、近年まれに見る大災害に見舞われ人的被害を含め未曾有の被害が発生しました。時として牙を剥く自然に対し、県民の生命や貴重な資産を守るためには、自然との調和に配慮をしながらも、降りかかる災厄を最小限に押さえる「減災」対策としての基盤整備は、着実に実施していかなければならないとの警鐘であったと考えています。

2. 社会資本整備の方向

私たちが暮らす長野県は、四季の変化がはっきりした美しい自然という恩恵に浴していますが、その一方で急峻な地形と脆弱な地質故に、自然は突如として私たちに大きな試練を与えることがあります。こうした認識を県民と共有し、必要なハード対策は着実に推進すると同時に、ソフト対策を効果的に組み合わせることが不可欠です。このため、大雨による河川の氾濫に備え、予想される浸水範囲や避難場所等を示す「洪水ハザードマップ」の作成に加え、本年6月からは、大雨による土砂災害発生危険度が高まったことを、市町村や報道機関へ知らせる「土砂災害警戒情報」の発表を地元気象台と共同して始めたところです。

また、高度経済成長期などに急速に整備が進んだ社会資本ストックの維持管理費の増大が危惧される中、その見通しを明確にすべきとの観点から、アセットマネジメントの重要性が強調されています。塩野七生さんの「ローマ人の物語」によれば、全ての道はローマに通ずと言われる8万kmにも及ぶ街道は、人間が人間らしい生活をするために必要な大事業として受け入れられ、名誉心と誇りを持

長野県知事

むら い じん
村 井 仁



って整備が行われていたこと、また、石が一分の隙間もなく平坦に敷き詰められ、草一本生えないほど完璧にメンテナンスされていたことなどが記されています。そしてこの心血を注いだ営みこそが、700年の永きにわたる「パックス・ロマーナ」を支えてきたことは明らかです。社会が必要とする施設整備を果敢に行うことの必要性と、不断の維持管理の重要性をこの歴史大書は教えてくれています。

3. 中期総合計画の策定に向けて

日本の一人当たりの所得は世界の最高水準にまで達しており、このような成熟した経済社会では、一種のゼロサムゲームにならざるを得ない、つまり地域間競争が避けられない状況になっていきます。幸いなことに本県は、県歌「信濃の国」にも歌われるように松本、伊那、佐久、善光寺の平がそれぞれの地域独特の歴史、伝統文化を育んできており、各地域が連携と競い合いを行うことで、活力ある地域づくりが実現できる資質を備えていると考えています。

現在作成中の『中期総合計画』では、少子高齢、

人口の減少など社会構造の変化を踏まえつつ「あらまほしき長野県」の姿を県民と共に考え、具体化したいと考えています。それと同時に、中期総合計画に基づく施策を戦略的に実行できる体制づくりや、スリムで持続可能な行財政基盤を確立していく必要があります。「分権改革」「行政システム改革」「財政構造改革」を柱に、本年3月に策定した行財政改革プランを着実に実行してまいります。

4. おわりに

社会構造が大きく転換する中で、活力ある県土と誰もが安心・安全に暮らすことができる地域づくりが求められています。

このため、ハードとソフト対策を効率的に組み合わせた「減災」対策に加え、不断に県土のメンテナンスを県民と協働して進めることにより、活力を支える基盤整備やゆとり・潤いを実感できるコンパクトなまちづくり、豊かな個性が引き継がれる地域づくりを実現してまいりたいと考えています。